

平成 30 年 6 月 23 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15H03224

研究課題名(和文) アジア諸語の社会・文化的多様性を考慮した通言語的言語能力達成度評価法の総合的研究

研究課題名(英文) Comprehensive Study of Cross-linguistic Proficiency Evaluation Methods with special consideration for the socio-cultural diversity of Asian Languages.

研究代表者

富盛 伸夫 (TOMIMORI, Nobuo)

東京外国語大学・その他部局等・名誉教授

研究者番号：50122643

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的と実施計画に基づき、研究代表者と研究分担者、研究協力者は協働して、非ヨーロッパ諸語に対し従来より適用妥当性の高い言語能力記述方法の開発研究を行った。特にEUにおける最新のCEFR改訂動向を参照するとともに、アジア諸語の多様な言語的特性や社会的・文化的特質を分析的に把握した上で、独自の言語能力記述項目作成のための指標抽出を行うことにより、アジア諸語に対してCEFRの適用可能性を拡げる方策を試みた。研究成果については定期的な研究会や外国での成果発表や国際研究集会を開催するなど、研究交流の実質化を図った。研究成果の発信は、成果報告書の刊行およびWebで2018年3月までになされている。

研究成果の概要(英文)：Based on the purpose and implementation plan of this research, the research representative, the research sharing persons, and the research collaborators worked efficiently to develop a linguistic proficiency evaluation method with high applicability to non-European languages.

In particular, referring to the latest CEFR revision trends in the EU, we analyzed diverse linguistic characteristics and socio-cultural properties of our target Asian languages, and then, by extracting socio-cultural features, prepared more appropriate linguistic ability description items in order to extend the applicability of CEFR settings to Asian languages.

Regarding research outcomes, in addition to periodical research meeting, we also held research results presentations in foreign countries and international symposia. Our research results has been published in a final report as well as on the Web by March 2018.

研究分野：一般言語学、言語教育学

キーワード：外国語教育 アジア諸語 CEFR 言語能力評価法 通言語的透明性 社会・文化的特質 言語類型 異文化間コミュニケーション能力

1. 研究開始当初の背景

- (1) ヨーロッパ連合(以下、EU)では、言語・民族・国境等を超えた広域の共同体を形成し、その将来を担う世代にヨーロッパ市民意識と資質の育成をはかっている。とりわけ高等教育の抜本的改革「ポローニャ・プロセス」の中で各国独自に担われてきた知的再生産を担う高等教育が標準化され変質しつつある。労働者及び学生のモビリティと外国語教育改革の基盤をなすものが言語能力評価のための「ヨーロッパ共通参照枠組み」(Common European Framework of Reference for Languages、以下 CEFR)であり、その開発は広汎な研究者の長年の努力により2003年にガイドラインが示された。約10年を経てその適用範囲は理論面・実践面ともに急速に進展し、EUの言語教育の現場と、行動中心複言語主義、タスクと解決能力の育成など教育理念そのものを変容させた。
- (2) しかしながら、CEFRの世界化が進むに従いアラビア語、中国語、日本語等、非EU言語へのCEFRの適用可能性の研究はされているものの、文字体系・音声・文法など言語類型的特点の差異や文化的ギャップのために未だ通言語的測定尺度としては確立されていない。ヨーロッパの言語・文化の均質的な土壌に育まれた言語コミュニケーションの敷居の低さはそのままCEFRの構成概念に反映されている。
- (3) 現在言語教育研究者にとって喫緊の課題としては、EUの研究者がなしえない非欧米言語の教育にも適用可能な新たな評価システムの開発が重要であり、特に日本やアジア諸国の言語教育の当事者がその点に研究活動を焦点化することで、より汎用性のある通言語的な共通枠組みを開発・提案する可能性を持っている。

2. 研究の目的

- (1) グローバル化の著しい国際社会の中で我が国は、英語のみならず高度な複数言語能力をもつ人材を養成する課題に直面しており、外国語教育においては通言語的透明性が確保された言語能力評価システムの開発研究が急務である。
- (2) 本研究の目的は、第1に、アジア諸語を対象とし、その社会・文化的多様性を考慮したコミュニケーション能力教育方法を研究することにより、より汎用性の高く通言語的かつ透明性の高い言語能力評価システムを開発し、国際的に提案することである。
そのため第2に、実施約10年を経たCEFRの再検証とEU内で進む社会・文化的コミュニケーション能力を勘案したCEFR改革に関する最新動向調査の結果を本研究に活用し、EU側の研究にも寄与する。
第3に、高等教育のみならず中等教育との接続や、生涯教育(非公式語学教育サー

ビス等)への応用など、現代日本社会のニーズにも対応した成果を社会に還元することも研究の展望として持っている。

3. 研究の方法

- (1) 第1に、アジア諸国の現地研究者たちの協力を得て、アジアの社会・文化的多様性を考慮しつつ、元来EUローカルで適応環境の制約のあるCEFRを批判的に援用して、アジア語圏の多様な特質を持つ諸言語にも適用しうる通言語的共通参照基準のモデルを開発研究すること。
第2に、EUで実施約10年を経て再検討の進みつつあるCEFR自体について、特に、欧米諸語の言語タイプ以外の言語への適用方法の開発と社会文化的コミュニケーション能力評価法開発にかかわる最新動向を把握し、上記研究の成果と総合すること。
第3に、日本の他のCEFR研究グループとの研究交流により、中等教育や生涯教育との連携を視野に入れつつ一般社会にも妥当性の高い能力到達度測定モデルを研究すること。
- (2) そのため研究計画に対応した3つの作業班を組織し、参加者は専門研究領域を活かし計画遂行に向けて協働した。分担する内容は分担者の多くが先行する富盛伸夫代表の科研活動により現地調査で研究協力者と共同研究をするなど、すでに本課題に関連する実績のある言語地域を専門的に担当した。
A班：アジア諸語地域の社会・文化的多様性を考慮した通言語的かつ透明性の高い言語能力評価システムの開発研究。
B班：CEFRの再検証および非EU言語への適用方法と社会文化的コミュニケーション能力評価法開発にかかわる最新動向調査。
C班：中等教育及び社会的ニーズに対応した外国語能力到達度評価基準に関する研究。
- (3) 上記以外に、国内外の言語能力評価法研究分野の専門家との協力体制を充実させた。すでに研究協力、共同研究、先行科研等で研究連携のある研究者の協力を得て講演会、シンポジウムなどが実質的に推進された。
- (4) 研究アジェンダの管理と運営責任体制を確保する目的で、分担者が委員となる運営委員会を定期的に開催して、研究代表者が総括的責任を担い、さらに各班のリーダーによる幹事会を構成し、全体的な研究遂行の管理・調整を行った。

4. 研究成果

本研究プロジェクトの活動経過と成果の詳細は研究代表者による、東京外国語大学語学研究所・協働科研のサイト「アジア諸語の社会・文化的多様性を考慮した通言語的言語能力達成度評価法の総合的研究」
<http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ilr/si>

te0008/index.html および、「「アジア諸語の社会・文化的多様性を考慮した通言語的言語能力達成度評価法の総合的研究」の概要と活動実績」

http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ilr/site0008/_src/7188/13_gaiyo.pdf を参照されたい。以下は、その中で主要な事項のみを記載する

- (1) 当初の計画に従い、上記の3つの作業班はそれぞれの目標に沿って順調に研究活動を遂行した。アジア諸語地域の社会・文化的多様性を考慮した通言語的かつ透明性の高い言語能力評価システムの開発研究を目的とし、研究期間を通して、東京外国語大学語学研究所を拠点として、定例の研究集会の他、国際シンポジウムや国際ワークショップの開催により、海外の研究連携大学およびアジア諸大学からの研究者とともに、CEFRの言語能力記述文 (descriptors) の妥当性を評価した。
- (2) アジアの諸大学での外国語教育システム立案者や言語教育従事者(教師等)に対する現地調査(特にタイ、ミャンマー、台湾など)により、Webや二次資料の情報では得られない信頼度の高い情報が入手できた。アジア諸語教育に関わる各分担者はアジアの多様な社会・文化的コンテクストを通言語的枠組みの中に捉えるために必要となる発話の社会言語学的コンテクスト分析、談話ストラテジーやポライトネスの表れ方など語用論的研究を推進した。
- (3) この活動成果をもとに、研究代表者と研究参加者は協働して、年間数回の書面アンケートあるいは直接の聞き取り調査により、語用論的ストラテジーや談話構成、また欧米地域とは異なる言語行動やphaticな要素などアジア諸語の多様な社会的・文化的特質を分析的に把握した上で、CEFRの能力記述項目に反映するような指標抽出の試みを行なった。
- (4) 国内調査では中等教育と大学教育との接続に関わる問題を先進的な複数のアジア諸語教育に取り組む長崎県教育委員会と県内離島の高等学校で聞き取り調査を行い、分析結果を公開した。
- (5) 特に最終年度は外国での成果発表や研究活動の集約としての国際ワークショップを開催するなど、研究成果を対外的にも発信し研究交流にも務めた。その中で、EU等ですすめられている社会文化的コミュニケーション能力の育成と異言語・文化間の仲介 (mediation) の評価法開発にかかわる最新研究動向を把握し、CEFRの非EU言語への適用妥当性の再検証および社会文化的コミュニケーション能力評価法開発にかかわる最新動向調査を行なった。その成果を国内外の学会・研究集会で成果発表を行なったほか、Web上で公開したことで問題の喚起を図るなどの試みを行った。

- (6) 2017(平成29)年9月26日開催の「言語教育(CEFR)国際ワークショップ CEFRの受容と適用可能性をめぐって」では研究成果の一般公開を行い、アジア諸語の言語的特性や社会・文化的特質を考慮した適用可能性を俎上にのせ、取りうる方策の検討を試みた。EUにおける最新のCEFR改訂動向情報とともに、東京外国語大学で進められている27言語に応用したCEFR-Jの導入計画が紹介されるとともに、学習者の複数言語使用や学習動機・ニーズに対応したEUでのCEFR改訂は本科研プロジェクトの問題意識と同じ方向性を持ち、多言語使用社会を前提にした複言語使用者の言語行動における異言語・異文化間コミュニケーション能力の再概念化に向かう研究展望が開けた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計29件)

岡野賢二、トゥザ ライン、富盛伸夫、アジア諸語への CEFR 導入に関わる諸問題 - ミャンマーでの言語教育調査からの示唆 -、アジア諸語の社会・文化的多様性を考慮した通言語的言語能力達成度評価法の総合的研究 - 成果報告書

(2015-2017) -、査読なし、2018、117-134

富盛伸夫、アジアにおけるポルトガル語とその文化の継承 - マラッカの言語

Kristang語、「東南アジア語圏におけるヨーロッパ系言語との接触・混成現象に関する動態的記述研究」- 研究成果報告 -、査読なし、2018、55-67、

<http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ilr/site0009/pg480.html>

上田広美、外国語としてのカンボジア語能力測定の試み、アジア諸語の社会・文化的多様性を考慮した通言語的言語能力達成度評価法の総合的研究 - 成果報告書

(2015-2017) -、査読なし、2018、1-10

根岸雅史、EUにおけるCEFR改訂の最新動向について、アジア諸語の社会・文化的多様性を考慮した通言語的言語能力達成度評価法の総合的研究 - 成果報告書

(2015-2017) -、査読なし、2018、85-94

藤森弘子、教壇実習における実習生の学び - eポートフォリオによる実習記録と自己評価結果から -、東京外国語大学留学生日本語教育センター論集、査読なし、Vol.44、2018、89-99

拝田清、日本の英語教育におけるCEFRの受容、アジア諸語の社会・文化的多様性を考慮した通言語的言語能力達成度評価法の総合的研究 - 成果報告書(2015-2017) -、査読なし、2018、49-58

矢頭典枝、KANDA×TUFSE英語モジュール「シンガポール英語版」にみる社会的・文化的特質、アジア諸語の社会・文化的多様

性を考慮した通言語的言語能力達成度評価法の総合的研究 - 成果報告書

(2015-2017) -、査読なし、2018、59-70

田原洋樹、グエン・ホアン・ミン、ベトナム語における呼称の扱いかた - 『外国人のベトナム語能力測定枠』に即して -、アジア諸語の社会・文化的多様性を考慮した通言語的言語能力達成度評価法の総合的研究 - 成果報告書(2015-2017) -、査読なし、2018、11-18

山崎吉朗、長崎県離島の外国語教育と我が国の中等教育における英語以外の外国語教育の現状と展望、アジア諸語の社会・文化的多様性を考慮した通言語的言語能力達成度評価法の総合的研究 - 成果報告書(2015-2017) -、査読なし、2018、71-83

ウィッタヤーパンヤーン・スニサー、タイ語教育スタンダード化に向けての効果的なCEFR導入の検証、アジア諸語の社会・文化的多様性を考慮した通言語的言語能力達成度評価法の総合的研究 - 成果報告書(2015-2017) -、査読なし、2018、105-115

ウィッタヤーパンヤーン・スニサー、CEFRを参照した日本人タイ語学習者の到達度レベルに関する考察 - 学習者アンケート調査分析から -、東京外国語大学東南アジア学、査読なし、Vol. 23、2018、20-36

富盛伸夫、YI Yeong-il、TUFSS言語モジュールを活用したアジア諸語の社会・文化的特質の指標化、外国語教育研究、Vol. 20、査読あり、2017、207-217

南潤珍、日本の韓国語教育における文化教育の現状と展望(原題: 朝鮮語)、査読あり、3-1、2017、147-175

Aznur Aisyah, Nam Yun Jin, K-Pop V Fansubs, V LIVE and NAVER Dictionary: Fansubbers' Synergy in Minimising Language Barriers, 3L: Language, Linguistics, Literature; The Southeast Asian Journal of English Language Studies, 査読あり、2017、112-127、147-175、DOI : 10.17576/3L-2017-2304-09、国際共著

Nomoto, Hiroki, Sintaksis nominalisasi bahasa Melayu, Aspek Teori Sintaksis Bahasa Melayu, 査読なし、Vol. 1、2017、71-117

ウィッタヤーパンヤーン・スニサー、CEFRを参照とした日本人タイ語学習者向け教材に関する考察 「外国語としてのタイ語教育」スタンダード開発に向けて、東京外国語大学論集、査読あり、Vol. 94、2017、169-188

ウィッタヤーパンヤーン・スニサー、タイ語教育におけるCEFR適用に向けたタイ語特有の社会・文化的要素に関する考察、東京外国語大学論集、査読あり、Vol. 95、2017、231-250

富盛伸夫、YI Yeong-il、アジア諸語学習者におけるCEFR自己評価と社会・文化的コミュニケーション能力の測定指標の開発、『アカデミック日本語能力到達基準の策定とその妥当性の検証』平成26-28年度科研費基盤研究(B)成果報告書、査読なし、2017、29-46

田原洋樹、ベトナム語におけるフランス語のレガシイ、A P U言語教育論叢、査読なし、VOL. 2、2017、10-17

上田広美、岡田知子、クメール語の動詞句の連続について、『東南アジア大陸部諸言語の動詞連続』東南アジア諸言語研究会編慶應義塾大学言語文化研究所、査読なし、2017、36-71

⑲ 藤森弘子・鈴木美加、国内外の日本語学習者によるCan-do自己評価の分析、『アカデミック日本語能力到達基準の策定とその妥当性の検証』平成26-28年度科研費基盤研究(B)成果報告書、査読なし、2017、48-69

⑳ 富盛伸夫、YI Yeong-il、アジア諸語学習者におけるCEFR自己評価の傾向と社会・文化的コミュニケーション能力に関わる諸問題 - 学習者アンケート調査(2014)の分析から -、外国語教育研究、査読あり、Vol. 19、2016、1-18

㉑ 田原洋樹、ベトナム語における『黄色い語』と『赤い語』に関する考察、A P U言語教育論叢、査読なし、VOL. 1、2016、62-70

㉒ 南潤珍、社会的関係形成をめざす韓国語教育に対する考察(原文; 韓国語)、『国際韓国語教育』、査読あり、Vo; .2-1、2016、75-102、国際共著

㉓ 上田広美、クメール語の文末詞daeについて、慶應義塾大学言語文化研究所紀要、査読なし、Vol. 47、2016、1-31

㉔ 藤森弘子、タスク型初級日本語教材の開発とその特徴 学習者発話の形態素解析結果から、東京外国語大学留学生日本語教育センター論集、査読なし、Vol. 42、2016、13-28

㉕ 南潤珍、日本の韓国語文法論(原題: 韓国語)、国語学(韓国: 国語学会)、査読あり、Vol. 77、2015、227-249、DOI : 10.15811/jkl.2016.77.008

㉖ 矢頭典枝、英語モジュールにみるカナダ英語の特徴、グローバル・コミュニケーション研究、査読なし、Vol. 2、2015、73-91

㉗ 根岸雅史、『中高生の英語学習に関する実態調査2014』から見えてくるもの(1) - 英語の指導と学習は授業の英語使用率とどう関係するか -、Arcle Review、査読あり、Vol. 10、2015、8-17

[学会発表](計21件)

Tomimori, Nobuo, Is CEFR applicable to Asian languages? - Proposals of necessary improvements from a socio-cultural point of view -, The

4th International Workshop on Advanced Learning Sciences (IWALS-4 Taipei, 2017)(招待講演)(国際学会)、台湾師範大学 2017

根岸雅史、GTEC CBT スコアと CEFR レベル関連付け調査、第 43 回全国英語教育学会島根研究大会、2017

Takagaki, Toshihiro、Posibilidades de linguística contrastiva del japonés y el español. XII Jornadas Abiertas de Lengua y Cultura de Japon, Universidad Autónoma de Madrid, Spain (招待講演)、2017

Nomoto, Hiroki、Variations in Austronesian bare passive agents, Current Issues in Comparative Syntax: Past, Present, and Future(国際学会)、2018

Nomoto, Hiroki、Shiro Akasegawa, Asako Shiohara, Reclassifying the Leipzig Corpora Collection for Malay/Indonesian, The 21st International Symposium on Malay/Indonesian Linguistics (ISMIL) (国際学会)、2017

藤森弘子、東京外国語大学アカデミック日本語Can-doリストに対応した初級教材、セルビア日本学会(招待講演)(国際学会)、セルビア・ベオグラード、2017

南潤珍、日本の韓国語教育における文化教育の現状と展望(原題:韓国語)、第4回国際学術セミナー(国際学会)、大韓民国・延世大学、2017

富盛伸夫、YI Yeong-il、TUFs 言語モジュールの会話文を活用したアジア諸語の社会・文化的特質の指標化、外国語教育学会、東京外国語大学、2016

藤森弘子、交流型授業における会話構築過程の比較分析 初級クラスと中級クラスの実践事例から、「Bali-ICJLE2016 日本語教育国際大会」(国際学会)、インドネシア・バリ州、2016

藤森弘子、国内外の日本語教員による「Can-do評価」の比較分析、第11回国際日本語教育・日本研究シンポジウム(国際学会)、中国・香港市、2016

富盛伸夫、李迎日、アジア諸語学習者におけるCEFR自己評価と社会・文化的コミュニケーション能力の測定指標の開発、国際シンポジウム「外国語教育における能力指標 - CEFRと日本語教育 -」、東京外国語大学、2016

藤森弘子、タスクは発話を促進するのか - タスク型教科書と文型中心教科書を使った学習者の発話産出、の比較から - 第21回メキシコ日本語教育シンポジウム(招待講演)、メキシコ・メキシコシティ、2016

Tomimori, Nobuo、YI Yeong-il、Trends in CEFR Self Assessments by Native

Speakers and learners of Asian Languages and issues concerning Proficiency Descriptors A 2014 Learner Survey-based Study、国際ワークショップ「卓越した外国語教育科学」、東京外国語大学、2015

富盛伸夫、李迎日、アジア諸語学習者における言語別CEFR自己評価の傾向と社会・文化的コミュニケーション能力の測定に関わる諸問題 学習者アンケート調査(2014)の分析から、外国語教育学会、東京外国語大学、2015

南潤珍、日本の韓国語文法論(原題:韓国語)、国語学会第42回全国学術大会、韓国放送通信大学校、2015

萬宮健策、言語アイデンティティの実際～スインディー語の事例から～、日本南アジア学会第28回全国大会、東京大学、2015

Mamiya, Kensaku、The status of Sindhi language in India in comparison to Pakistan, 2nd Kashmir International Conference on Linguistics, The University of Azad Jammu & Kashmir, Muzaffarabad, Pakistan, 2015

藤森弘子、can-do行動目標に基づいたタスク型初級教材の開発と実践 タスク遂行のプロセスに焦点をあてて、ハワイ大学マノア校東アジア言語文学科特別講演会(招待講演)、ハワイ大学・ホノルル、2015

藤森弘子、アカデミック日本語教育における対話タスクの連続性、第19回ヨーロッパ日本語シンポジウム ヨーロッパ日本語教師会(招待講演)、フランス・ポルドー、2015

Nomoto, Hiroki、The development of the passive in Balinese, The Fifth International Symposium on the Languages of Java (ISLOJ)、インドネシア・インドネシア教育大学、2015

② Nomoto, Hiroki、Pelaku ayat pasif dalam bahasa Melayu Klasik, International Workshop: Current issues in research on languages in Borneo and Malay language、マレーシア・サバ大学、2015

〔図書〕(計5件)

富盛伸夫、アジア諸語の社会・文化的多様性を考慮した通言語的言語能力達成度評価法の総合的研究 - 成果報告書(2015-2017) -、平成 27 - 29 年度科研費基盤研究(B) 成果報告書(編集、執筆)、東京外国語大学、2018、152、<http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ilr/site0008/pg402.html>

上田広美、カンボジア語 読解と練習、白水社、2017、304

成田節 (分担執筆)、言葉から社会を考える、担当:「移民と若者言葉」、白水社、2016

Masashi Negishi & Yukio Tono (分担執筆)、Language Assessment for Multilingualism Paperback: Proceedings of the ALTE Paris Conference, April 2014、Studies in Language Testing、2016、590

根岸雅史 (分担執筆)、新しい英語教育の展開、担当:第2章「英語科の到達目標と評価」、玉川大学出版部、2015、41-81

〔その他〕

ホームページ:東京外国語大学語学研究所・協働科研「アジア諸語の社会・文化的多様性を考慮した通言語的言語能力達成度評価法の総合的研究」
<http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ilr/site0008/index.html>

6. 研究組織

(1)研究代表者

富盛 伸夫 (TOMIMORI, Nobuo)
東京外国語大学・その他部局等・名誉教授
研究者番号: 5 0 1 2 2 6 4 3

(2)研究分担者

成田 節 (NARITA, Takashi)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号: 5 0 1 8 0 5 4 2

根岸 雅史 (NEGISHI, Masashi)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号: 5 0 1 8 9 3 6 2

藤森 弘子 (FUJIMORI, Hiroko)
東京外国語大学・大学院国際日本学研究院・教授
研究者番号: 5 0 2 8 2 7 7 8

野元 裕樹 (NOMOTO, Hiroki)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・講師
研究者番号: 1 0 5 8 9 2 4 5

岡野 賢二 (OKANO, Kenji)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授
研究者番号: 6 0 3 7 6 8 2 9

南 潤珍 (NAM, Yun Jin)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授
研究者番号: 3 0 3 1 6 8 3 0

上田 広美 (UEDA, Hiromi)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授
研究者番号: 6 0 2 9 2 9 9 2

吉枝 聡子 (YOSHIE, Satoko)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授
研究者番号: 2 0 3 1 3 2 7 3

丹羽 京子 (NIWA, Kyoko)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授
研究者番号: 9 0 6 2 4 1 1 4

萬宮 健策 (MAMIYA, Kensaku)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授
研究者番号: 0 0 4 0 3 2 0 4

高垣 敏博 (TAKAGAKI, Toshihiro)
神奈川大学・外国語学部・教授
研究者番号: 0 0 1 4 0 0 7 0

田原 洋樹 (TAHARA, Hiroki)
立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・准教授
研究者番号: 6 0 3 3 1 1 3 8

矢頭 典枝 (YAZU, Norie)
神田外語大学・外国語学部・准教授
研究者番号: 0 0 1 4 0 0 7 0

拝田 清 (HAIDA, Kiyoshi)
四天王寺大学・教育学部・准教授
研究者番号: 0 0 5 9 7 7 1 8

(3)研究協力者

山崎 吉朗 (YAMAZAKI, Yoshiro)
スニサー・Wittayapanyanon・齋藤 (SAITO, Sunisa Wittayapanyanon)